

# ○タイワンムカゴソウの再検討 (橋本 保) Tamotsu HASHIMOTO: Reappraisal of a Taiwan *Dendrochilum*

タイワンムカゴソウは台湾南端の恒春半島 (T. P. Lin, Native Orchids of Taiwan P. 155, 1975) と蘭嶼 (紅頭嶼, 基準標本の産地) に知られ, 多くの文献では *Dendrochilum formosanum* (Schltr.) Schltr. の学名が用いられてきた。近年の例では S. Y. Hu in Quart. Journ. Taiwan Mus. 26: 373 (1973), T. P. Lin, loc. cit., Liu et Su<sup>1)</sup> in Li et al., Flora of Taiwan 5: 292 (1978) などがそうである。これらの中で Liu et Su 両氏は, フィリピン産の *D. clemensiae* Ames に似ているが, 唇弁の側裂片とずい柱の側翼がともに全縁であることにより異なると記された。中国本土の学者による近年の意見は解らないが, 中国種子植物科属辞典 p. 129 (1958) には同上の学名<sup>1)</sup> が採用してある。

いっぽう S.-S. Ying, Coloured Illustrations of Indigenous Orchids of Taiwan 1: photo. col. no. 60 (p. 17), 157-159 (descr.), f. 54 (p. 158), 446-447 (nomencl.) (1977) によればタイワンムカゴソウは *D. microchilum* (Schltr.) Ames であるという。私の理解では *D. formosanum* と *D. microchilum* は時に異属とされるほど花部の形態に差があり, とても同一種にするような仮説は信じ難い。そこであるいは台湾に同属が 2 種 (ちなみに中国大陆に同属の記録は無い) あるかもしれないと思い調べてみた。

まず Liu et Su 両氏が比較された *D. clemensiae* との関係であるが, 両者は確かに近縁種と思われ, かつ両氏が記されたような差はこの属の分類上は種を分けるのに役立つ形質としてこれまで踏襲されてきたものである。したがっていちおう別種としておきたい。

次に Ying 説である。氏の書中にあるカラー写真 (p. 17) は全形と花序のクローズアップの 2 枚があり—索引に載っていない—これらは私が理解し, かつ小石川植物園で栽培されている *D. formosanum* の姿をよく現わしている。しかし pp. 157-159 の英文と中文の記載にはフィリピン産の *D. venustum* (Ames) Ames, Orchid. 2: 12, t. 22-III & 3, 88 (1908)—*D. venustum* (Ames) Pfitzer の方が 1 年前に発表されているが Ames は後にこれら 2 つの学名を *Acoridium microchilum* (Schltr.) Ames = *D. microchilum* の異名として整理した—の記載文から採られたと思われる箇所が多い。すなわち植物体については台湾産のものと *D. venustum* の記載文の合成, 花部については微妙なサイズの点でもほとんどが *D. venustum* のそれと同じである。さらに f. 54 のうち a (開花之植物体) と e (唇弁) は明らかに Ames の t. 22-III & 3 をラフに描き直したもののようである。また b (後萼片), c (花弁), d (側萼片) および

1) 学名の原著者名の引用なし。

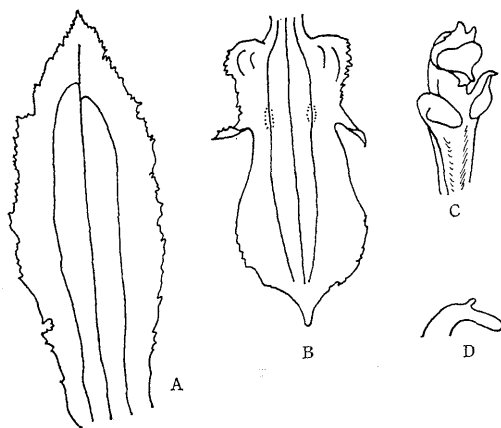


Fig. 1. *Dendrochilum uncatum* var. *formosanum*. A. Petal, expanded. B. Lip, partially expanded, dots indicated a pair of calli. C. Column from front. D. Apex of lateral wing of column, expanded. Scales  $\times 10$ .

f (蕊柱) は T. P. Lin, Ibid. 156 に描かれた *D. formosanum* に由来しているらしい。とくに f はほとんど修正なしに出されている。*D. venustulum* では 1 本とされる側花卉の脈は 3 本に描いてあるのもそのためだろうか。側萼弁も 3 本らしく描いてあるが、これは Lin 氏の図にはない。

以上の事実から考証すれば Ying 氏のいう *D. microchilum* はほとんど実体の無いものと思える。したがって現在の知識では、台湾の同属はタイワンムカゴソウただ 1 種と考えるほうが妥当であろう。

これらのことがらをふまえてタイワンムカゴソウの学名 *D. formosanum* (Schltr.) Schltr. が適当であるかどうか調べてみた。Schlechter は “Sie steht einigen Arten aus den Philippinen und dem *D. dolichobrachium* Schltr. (*Platyolinis dolichobrachium* Schltr.) von Borneo am nächsten, hat aber bedeutend grossere Blüten?” (Fedde Repert., Beih. 4: 185 1919) と記している。Liu et Su 両氏の記事はこのことを意識したものかも知れない。そこで私なりに再検討した結果、タイワンムカゴソウはむしろフィリピン島のルソン島にやや普通とされる *D. uncatum* Reichb. f. に近縁であるとの考えにいたった。その理由はまず花の形の類似で、Ames, Ibid. 108 に出された図と比較すると、腹部側へ屈曲した先の鈍い柱の側翼 (同属の中でも珍しい)、不整な微欠刻のある側花卉と唇弁側裂片の縁、唇弁内面にある 1 対のカルスの大きさと位置が、同属の他のどの種類よりも似て見えるからである。また植物体の形や花の概形およびそれらのサイズなどもほぼ同じである。同島から報告され、後にシブヤン、

パナイ、ネグロスの各島に分布することが知られた *D. longispicatum* Ames はその次に似ているものだが Ames, Ibid. 106 によると植物体の概形が異なり、長い偽鱗茎（長さ 6 cm に達する）と長く優美な総状花序（花序柄の長さ 19~20 cm、花序の長さ 17 cm 内外）ですみやかに区別できるという。同ページの図をみると、ずい柱の側翼の屈曲が弱く、唇弁内面のカルスがより大きく描かれている。ルソン島にだけ知られていた *D. uncatum* と、より分布域の広い *D. longispicatum* とが果して別種であるかどうか、やや疑問が残るが、この問題は将来の研究にゆずりたい。かりに同種関係としても先に発表された名前は *D. uncatum* である。それでは *D. uncatum* とタイワンムカゴソウの違いはどうか。Fig. 1 に示したように、後者のずい柱側翼の後方に微小な欠刻があるのに前者にはない。また側花弁と唇弁側裂片の縁の欠刻が後者は前者ほど著しくないというやや微妙な形質が鍵になりそうである。

ボルネオの *D. dolichobrachium* については検討し得なかったので将来の研究にまたなければならぬが、かりに同種関係であるとしても学名は *D. uncatum* の方が早く発表されているので後者の方を採用ことになる。

タイワンムカゴソウは *D. uncatum* と形態がよく似ているが少し異なり、分布域もその北端であることを考慮して学名を次のように提案したい。

***Dendrochilum uncatum* Reichb. f. var. *formosanum* (Schltr.) Hashimoto, comb. et stat. nov.**

*Platyclinis formosana* Schltr. in Bull. Herb. Boiss. ser. 2 6: 302 (1906) —  
*Dendrochilum formosanum* (Schltr.) Schltr. in Fedde Repert., Beih. 4: 185  
 (1919).  
 (国立科学博物館 筑波実験植物園)

□倉田悟・中池敏之（編）日本シダの会（企画）：日本のシダ植物図鑑 2. 648 pp. 1981. 東京大学出版会、¥10,000. 本誌 54: 378 で紹介した第 1 巻と同じく 100 種のシダを収録、分布図・生態写真・線画などが同じ形式で載っていて立派なできばえである（ただし胞子の写真はまだ電顕になっていない）。今回はチャセンシダ科とウラボシ科が主になっている（前の紹介に書き落としたが第 1 巻はワラビ科とオンダ科に重点）。なお本書は第 8 巻まで、合計 800 種をもって完結の予定になっていて着々進んでいるということである。  
 (伊藤 洋)